

さて、生命主義的救済観には、アニミスティックな農耕心性が普遍的な救済の説明原理へと止揚されたものであるという前提があった。しかし、単に農耕心性の延長線上にあるのではなく、「生命」というコンセプトで諸相と人間の心の内奥を実在論的に説明しようとする思想状況(所謂、大正生命主義)への応答として、言説化された可能性も濃厚であるように思われる。

大正期、昭和初期の本門仏立講では、宇宙は「実相真如の妙理」として日隆門流の伝統的教義で説明されていたが、生命主義的救済観で指摘されるような生命言説は用いられていなかった。また、教化育成の場で語られる功德・現証利益(仏果)の説明としては、信力に応じた仏力が顕現するとされ、実相真如の妙理との相即関係で説明されるものではなかった。

一方、大正三年、在家日蓮主義者を中核として結成された法華会の主要メンバーであった小林一郎は、その法華経解釈(『法華経大講座』)において、仏を無限の生命として把握し、大いなる生命の温かさ、そこに含まれる各自の生命との連関(同化し得る関係)について述べていた。

西洋流の理性哲学を生命言説で止揚しようとする小林の講義を聴き(中央大学)、また獄中で小林の書籍を取り寄せ、その影響を受けたと考えられる戸田城聖は、従来の日蓮仏教を大胆に生命論的に解釈するようになった。すなわち、宇宙大生命と調和のとれた状態こそが、各自の生命力の源泉であり功德の源泉となる教説である。

これは、本門仏立講が、その宇宙観として、全宇宙は妙法そのものである、と説くにもかかわらず、生命力の増幅とそれに

伴う現世利益をもって、仏果を判断する思考形式を有しなかったことと対照的である。

本門仏立講と創価学会という、基本的宗教性(現証布教や謗法観など)において酷似する日蓮系新宗教教団において、なぜ創価学会においてのみ生命主義的救済観が看取されたのかについては、それが、「生命言説」という時代の思想言説との応答関係のなかで練り上げられたものであったとみることができ。同じ新宗教でも、通時的分析を通すことで生命主義的救済観の生成に関し、有無や相違があることが指摘できよう。

これら日蓮系新宗教の比較から、近代の日蓮仏教において「生命」がどのように言説化されるかは、置かれた時代の思想状況との応答関係がより重要であり、農耕心性から直接的に派生したのではないことを指摘したい。

日蓮における信徒教化

——病を中心として——

奥野 本 勇

一 はじめに

日蓮聖人(一二二二—八二二)は、仏教の教主釈尊が説かれた一代聖教の中で法華経が最上の教えであるとの確信のもと、法華経の行者として教化活動を展開されている。その実践・修行は法師品に示される「五種法師」の中の「解説」に当たる。

ところで、仏教においては、私たちが生存する以上、四苦八苦の苦しみがあるという。その四苦とは「生老病死」である。

そこで、この「病苦」に視点を置くとき、いかに聖人は信徒に對して「病苦」への教導をなされたのか、ということが問題となる。

そこで管見のかぎり、聖人の記された著述・書簡中から、病苦に対処された檀越を整理すると十二名確認できる。すなわち、①南条兵衛七郎②聖人の母君③富木尼④妙一尼の子⑤高橋六郎⑥妙心尼の夫⑦太田乗明⑧三位房⑨四条氏の仕える江馬氏の病⑩三沢氏⑪石河兵衛入道の娘⑫南条時光である。本稿では⑦の下総の信徒太田乗明への教導に注目したい。

二 日蓮聖人と太田氏との交流の軌跡

聖人と太田氏との交流の軌跡をたどると、十二遺文と『宗祖御遷化記録』が確認できる。すなわち、『転重軽受法門』『観心本尊抄副状』『富木殿御返事』『大田殿許御書』『曾谷入道殿許御書』『太田入道殿御返事』『尊靈御菩提御書』『乗明聖人御返事』『富木入道殿御返事』『乗明上人御返事』『慈覚大師事』『大田殿女房御返事』であり、『宗祖御遷化記録』の一書である。これらの遺文中、太田氏の名前がみられるのは九遺文、太田氏の妻へは一遺文、富木氏の書簡中にその名がみられるのが三遺文、聖人入滅後の記述が一書である。これらの記述から確認できることは、太田氏は聖人より宗教的集会や書簡を通じた教導を受けていること、また、太田氏夫妻がともに供養の品を聖人へ送っていること、さらに葬送の儀に至るまで信仰的交流が継続していることなどである。

三 『太田入道殿御返事』における経・論・釈の引用

そこで聖人の具体的な教導について『太田入道殿御返事』に

確認すると以下のことが明らかとなる。第一に経論釈であるが、經典は『維摩詰所説経』『大般涅槃経』『妙法蓮華経』の三書、インドの論疏は龍樹菩薩の『大智度論』の一書、中国の章疏は、天台大師の『妙法蓮華経玄義』『摩訶止観』と妙楽大師の『法華文句記』『止観輔行伝弘決』の四書、日本の注釈書は伝教大師の『法華秀句』、弘法大師の『秘藏宝鑰』の二書からの引用がなされていること。第二にこれらの記載の意図は、太田氏の病の根本原因とそれに対する救済、また、『法華経』が最上の教えであることを明かすためである。ただし、空海の『秘藏宝鑰』の文は真言宗の誤りを指摘するための引用である。聖人がこれら引用典籍の結論として示されることは、真言の信奉者であった太田氏が、聖人の教えに帰依し改悔したことから、転重軽受によって病が表出したこと。そして、釈尊は阿闍世王の病苦を「月愛三昧」によって救済なされたが、正法たる『法華経』は、「月愛三昧」を説く『涅槃経』よりも勝る經典であるから、その瘡病は必ず治り寿命が得られることを明示されるのである。

四 おわりに

以上、日蓮聖人における信徒教化について、太田氏の病苦に對する聖人の教化について確認した。このことから、聖人は病を受けた太田氏に對し、『法華経』による救済を目的とし経論釈の引用をとおして教導されていることが知られる。それは、太田氏の深い仏教理解があったものである。そして聖人は太田氏の直面する「病苦」に對し、教主釈尊・『法華経』を至上とする立場から教導されていたことが理解できるのである。